

ゲスト卓話 長崎刺繍技術保持者 嘉勢 照太 氏「長崎刺繍の煌めき」



〈略歴〉昭和 26 年長崎市八百屋町生まれ。昭和 57 年八田刺繍店へ弟子入り。平成 7 年「長崎刺繍工房」として独立。平成 14 年、長崎市指定有形文化財の万屋町の「魚尽し傘鉾垂れ」復元 10 年計画をスタートし、平成 25 年(2013)に完成。平成 22 年(2010)には長崎県指定無形文化財長崎刺繍技術保持者に認定。

現存最古の長崎刺繍は、1772 年に作られた桶屋町傘鉾垂れ「十二支」です。長崎刺繍は、長崎でしかできないデザインと生地を使って、「くんち」に関したものが多く、江戸時代の長崎の繁栄の証としての刺繍が「くんち」を通して残っています。

私が復元しました万屋町傘鉾垂れ「魚尽し」は、1827 年から縫屋幸助が始め、塩谷熊吉と 2 人がかりで作ったもので、先々回の「くんち」まで奉納されておりました。江戸期に作ったものを補修・メンテナンスしてきたのが私の師匠や、そのまた師匠です。そういう中で、万屋町の傘鉾を 10 年以上かかって復元しましたが、文献社さんのお力添えもあり、『長崎刺繍の煌めき』という本が出版されました。

「魚尽し」は、16 種類 29 匹の魚が刺繍されております。赤い生地に直接刺してあるのではなく、1 匹 1 匹、別で作ってあるものを「くんち」の 1 か月ほど前から取り付け始め、波から銀の玉まで全部取り付けます。そして奉納後、「くんち」が終わるとまた、数日かけて全部取り外します。それを 7 年ごとにずっと繰り返して、1827 年から今まで来ているわけです。この魚たちの縁には、たくさん取ったり付けたりした跡が残っております。この下絵がなんと、ロンドンで発見されてオークションに掛けられ、現在は米国のボストンにあります。残念ながら里帰りできておりませんが、いずれ実現させたいと思っております。

魚は長崎の近海で取れた魚だけを図案にしてありますが、下絵を描いたのは原南嶺斎で、川原慶賀より少し前の画家です。実際に泳いでいる魚をスケッチしたとのことですが、それを繡師が、やはり生きた魚を見ながら刺したということです。刺繍は写実とは違いますが、「くんち」の踊り場で映えなければいけないので、工芸といいながら非常に絵画的なデザイン力が問われるのです。そこが刺繍の難しいところで、刺繍そのものより下絵が非常に大事です。そして、それがあったのが長崎なのです。なぜかという、当時オランダや中国と貿易する中で唐絵目利きなどの絵師がいて、非常に画家の層が厚かったということなのです。長崎刺繍の制作ではまず、生きた魚を写生することが最も大事です。そして、こより、和紙など古典的な材料を使って江戸期のままの手法で作っております。そして、シーボルトのコレクションにもあるように、長崎刺繍の作品は外国でしっかり残されております。

長崎刺繍というのは江戸期のものがいまだに残っている。これを未来につないでいくことが私の責務と思って、やっております。



東古川町「川船」の船頭衣装と「鯉」の試作品

『長崎刺繍の煌めき—諏訪神事「くんち」奉納の伝統工芸総覧』（長崎文献社編）

長崎人のこころと誇りの結晶

- ・長崎伝統の祭り「くんち」にかける情熱の結晶
- ・鎖国時代の貿易港が生み、育てた文化の結晶
- ・町民が生んだ伝統工芸の高い技術が結晶 《主な内容》
- ・復元新調！万屋町「魚づくし」大接写・嘉勢照太 匠の「技」を語る
- ・長崎くんち刺繍総覧 傘鉾垂れ 船頭衣装ほか
- ・シーボルトコレクション

寄稿 ◆越中勇 ◆西岡陽子 ◆鳥丸知子 ■定価 4500 円(税別)



<長崎文献社 HP : www.e-bunken.com/shopdetail/000000000284/>